

- 1 蓮の根を掴めば大地昇るかも
- 2 芹摘みの音のみを手に集めゆく
- 3 弦楽団三百年後月見草
- 4 歌はずに詩友は去れりはこべぐさ
- 5 帰るころ四、五人消えて湯屋めぐり
- 6 ねむる間もかすか胡桃の心臓よ
- 7 白秋忌のココアに浸す雲の先
- 8 二月空に煙が描く難破船
- 9 雪原に一つ火ともる他人(ひと)の夢
- 10 自転車滅世は一声に過ぎざるも
- 11 自転車燦滴るものに夕陽差し
- 12 自転車聖黒三角を包囲せよ
- 13 自転車暗瞳に梅を映し合ひ
- 14 自転車染竹を接ぎ行く浄土道
- 15 自転車遊風呂敷を追ひ四界まで
- 16 自転車識言海に鱻を見失ひ
- 17 自転車呪母のふるさと花まみれ
- 18 自転車然雲の断面あたたかし
- 19 自転車宴鱗着(うろこぎ)のまま輪廻して
- 20 麦踏んで行く遙かなる教室よ
- 21 てのひらの御器に盛られし昼料理
- 22 足うらに耳持つ少女聖五月
- 23 まばたきの青太陽に鯖跳ねよ
- 24 曙光とはまづ神の目を横に裂き
- 25 死も死後も光よ虹を貫く汽車

- 26 薔薇紅き日の擬科学の煙かな
- 27 少年の後ろをこする羊雲
- 28 六月の真水を抜ける巨体あり
- 29 ひらがなは火で綴るべし夏よもぎ
- 30 へるめすと行く野薊の花の上
- 31 影の世やただ藤ばなを仰ぐのみ
- 32 掌に置けば創造見ゆる青胡桃
- 33 口中に蝶飼ふをとこ花野宿
- 34 てんぷらを都へはこぶ花ぐもり
- 35 つゆ草や百人姉妹笑ひ止む
- 36 空き家より空き家が覗く晴れ間かな
- 37 芹噛みて黒き眼を育てたり
- 38 「謹呈」の二字遊び出す梅の花
- 39 転覆の悲鳴かすかに春の沖
- 40 遙か寄す刺繍と思へ春の海
- 41 鶏頭を来て鶏頭を抜け切れず
- 42 罌粟畑を炎上の船加速せり
- 43 神真似て霧より蛇を掴み出す
- 44 昼月を見る千年の頬杖や
- 45 母の湯のあとに漂ふ花くるす
- 46 先師みな黒朝顔と言ひて死す
- 47 外套のなかの夕五時つばくらめ
- 48 子ら跳ねて金平糖の夕あらし
- 49 烏瓜ふと天球は静止せり
- 50 人消えるたび明るむや夏祭

- 51 煉獄の空を落ち来し黒揚羽
- 52 麦秋へ歌捨ててに行く人の群れ
- 53 福音を開けば逃げる誤植ども
- 54 丸善を出て洋行の雲となり
- 55 つばめ来て偽史の国家を嘯くや
- 56 野鼠ら身を寄せ合ひて貴種の夢
- 57 いちぢくに眠る恵比寿を蹴り起こす
- 58 夢を練る棒のごときを握る夢
- 59 人体を出て奔流の天の川
- 60 機関車のこすれるたびに梅匂ふ
- 61 発光す林檎も産みの苦しみよ
- 62 椿投げ入れて真昼やがらんどろ
- 63 ダンテ忌の中庭に犬迷ひ込み
- 64 牛行くに遅れて進む牛の腸(わた)
- 65 たこてんや投げて捕らへむ蛭子神
- 66 梅咲けば悪霊一家まぶしくて
- 67 蛇と蛇むすべば尾から桃色に
- 68 熊のみが月下を濡れず帰り行く
- 69 薄切りのいるかも浜の宴飯(うたげめし)
- 70 秋野原とほく火摘みのをんなたち
- 71 死神に抱かれて靱の匂ひ充つ
- 72 ほらここにてづるもづるの原神話
- 73 空を墜ち行く中世以来の少年よ
- 74 皮膚病みの神ちらちらと火を漏らし
- 75 蕎麦の花むかし銀河を散りばめて

- 76 言霊のイメージとして柘榴あれ
- 77 輝きのアマテラス似の梨なるよ
- 78 罇入れて完成となる秋の空
- 79 一杯の茶に一円の鳶を嚙み
- 80 魚(いを)割いて虚ろの空を深くせり
- 81 水落とし落とし魚(いを)ただ空にあり
- 82 魚(いを)亡び始まる朝の一響き
- 83 秋天に哭く魚群(いをむれ)を遙か聴く
- 84 曇天の濁りを魚(いを)の影うごく
- 85 空に消す魚体よ青を塗り重ね
- 86 いっぴきの魚(いを)の頭(づ)を打つ稲びかり
- 87 空曇る遠近に魚(いを)こすれ合ひ
- 88 夕焼けの奥の火の粉よ魚(いを)に降る
- 89 天の水溢れむとして魚(いを)ひそか
- 90 舌の地図見せて大航海の友
- 91 あゝ金の一滴の血を揚雲雀
- 92 薔薇に薔薇近づけて得る偽(にせ)時間
- 93 描くほど未完に近づく鯨絵や
- 94 喝采のなかつてんぷらは昇りゆく
- 95 自転車に法衣からむも夏山河
- 96 愛し合ふ鱒は終末の空を染め
- 97 古代知ふと水甕に手を浸すとき
- 98 春風の奥より御器をはこぶ音
- 99 晴天にしばし焚書の煙文字
- 100 涅槃光かすかに差して夕の風呂